

公益財団法人 檉の芽会 御中

伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】	① 作成日	令和6年5月27日	
② 法人・団体名	一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク		
③ 所在地	〒330-0063 さいたま市浦和区高砂 3-7-2 タニグチビル 2階		
④ 責任者氏名	土屋 匠宇三	(役職名等)	代表理事
⑤ 担当者氏名	皆川 佳菜恵	(役職名等)	本部ボランティア担当

【奨学活動の概要】	⑥ 助成交付決定番号	R05-027	⑦ 助成金額	148万円	⑧ 申請カテゴリー	DS
⑨ 奨学活動名	生活困窮世帯への学習支援における支援者向け研修					
⑩ 主な実施場所	さいたま市・桶川市・春日部市・秩父市・越谷市・本庄市・狭山市・坂戸市・白岡市					

⑪ 活動内容とその成果の概要（詳細は【様式3-2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

貴財団の助成金を活用して研修を計18回実施した。内訳は全学習支援員を対象とした全体研修を2回、統一したテーマで講師が当法人の事務所10カ所を巡回するエリア研修を10回、そのほか各事務所の自主企画による研修を6回実施した。全体研修では「虐待ケースへの対応と行政との連携」「発達障がいと二次障がい」をテーマに実施した。エリア研修では「虐待当事者の体験談と必要な支援について」をテーマに開催した。幼少期に虐待の被害を受けた当事者2名を外部講師として招き、実体験をもとに「虐待当事者にとってどのような大人の存在が支えになったのか」についてご講演いただいた。自主企画では各事務所でのニーズを踏まえたテーマや現在支援しているケースに関わるテーマを各自設定して実施した。研修にはのべ445人が参加した。

テーマに合わせて実施形態を工夫したことで、講師と参加者の質疑応答も活発にかわすことができた。また、これまで予算等により開催回数も限られたことでテーマも絞っての実施に留まっていたが、開催回数を増やしたことで外部講師を招いた多種多様な研修を実施することができた。いずれも研修も日頃の支援現場での実践に直結するものであった。

⑫ 奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式3-2等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A:人)	平均時間 (B:時間)	活動量 (A x B)	備考・補足
中学生等				
高校生等				
大学生等				
学習支援員等	445	2	890	
その他				
合 計			890	

⑬ その他の定量的な数値（任意）

令和 5 年度 伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：生活困窮世帯への学習支援における支援者向け研修

法人・団体名：一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク
作成者 氏名：皆川 佳菜恵

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

生活困窮世帯の子どもへの学習支援事業を受託する団体として、スタッフの支援の資質向上を目的とした研修を開催してきた。これまで研修は学習教室で実務を担っている学習支援員自身が組み立てて実施していた。令和 5 年度は貴法人の助成金を活用することで外部講師を招聘し、より専門的な研修を実施した。また、研修コーディネーターを設置した。

全体研修を 2 回、統一したテーマで講師が当法人の事務所 10 カ所を巡回するエリア研修を 10 回、そのほか各事務所の自主企画による研修を 6 回実施した。これらの研修にはのべ 445 名が参加した。

また上記に加え、法人設立者の理念を継承するために前代表理事からのメッセージを入れた研修動画を作成した。動画を作成することで、繰り返し研修に使えるよう工夫した。

2. 実施した奨学活動の詳細

①全体研修「子どもや家庭の想いを汲み取る支援について～児童虐待対応の視点から～」

日時	令和 5 年 10 月 18 日 (水) 10:00～12:00
場所	さいたま共済会館 6 階
目的	虐待通報数は年々増加しており、痛ましい事件も発生している。特に支援対象世帯では 7 割以上がひとり親家庭で、孤独や疲労の中で子育てをしているため、虐待のリスクも高いと考えられる。実際、親子喧嘩や家庭内の不和に関する相談が寄せられることもある。そこで長年子ども支援に携わる行政職員を講師に招き、行政としての取り組みと学習支援に携わる立場として虐待防止のためにできることを学ぶ機会とする。
講師	富士見市子ども未来応援センター 猪野塚容子氏
参加者	学習支援員 112 名
内容	9：30～ 開場 10：00～ 開会のあいさつ（土屋代表理事） 10：10～ 個人情報保護について（白松事務局長） 10：15～ 講演・質疑応答（猪野塚氏） 「虐待ケースへの対応と行政との連携」をテーマとし、虐待防止のためには子ども主体で考え子どもの言葉や訴えを信じること、日頃から子どもと近くで接している大人がいち早く子どもの異変に気が付くこと等、支援の現場で必要な視点を学んだ。 11：25～ 感想交流 11：50～ 閉会のあいさつ（山浦副代表）

■参加者より

- ・ 国の対策と市での取り組みを詳しく話していただき、わかりやすかったです。子どもの現状、バックグラウンドを知ることができました。
- ・ 行政でアプローチできない部分とアサポートがアプローチできる部分がいかになっているかは、法人に所属して間もない私には大変学ぶことが多かった。
- ・ 子ども虐待とは何かを具体的な事例で分かりやすくお話しいただきました。「子どもを守る」と一言で言うには大変に重い事例で、私たちの日々の取り組みを見直す大切さを改めて感

じました。

- ・ アスポートが単に学習支援を行う機関としてではなく、世帯と密接に関わり、関係が作れている機関として行政担当者から見られており、子ども達の安心安全を守るネットワークの重要な一部であることを改めて認識した。「子ども主体で考える」という事を忘れず、子どもや世帯の変化に注視して支援を行っていきたいと感じた。



②全体研修「発達障がいのある子どもがいる親から学ぶ～子どもとの接し方や支援の視点は？～」

日時	令和5年11月15日(水) 10:00～11:45
場所	さいたま共済会館6階
目的	<ul style="list-style-type: none">・ 発達障がいのお子さんを持ち著者・講演家としてご活躍の立石美津子氏より、お子さんとともに歩む日々で得た学びやご自身の経験に基づくお話を伺う。・ 障がい受容や2次障がいについて学び、子どもへ声のかけ方、保護者の支援について考える機会とする。
講師	立石美津子氏
参加者	学習支援員・学習指導員・ジュニアアスポート事業チューター(教室補助員)・学習支援ボランティア101名
内容	<ul style="list-style-type: none">・ 実際に発達障がいのお子様を育てた体験談・ 親としての葛藤、受容までのプロセス・ 二次障がいの原因と防ぐための方法・ 教員や支援者が保護者に対して子どもの障がいについて話すときのポイント

■参加者より

- ・ 上から目線ではなく助言を保護者等に受け入れてもらえる環境づくり・関係性の構築が大切であり一緒に考えていくことが大切であると改めて再認識した。
- ・ 障害受容のプロセスが参考になった。二次障害に至るプロセス、それに関わる立場であるならその苦しさを少しでも理解し寄り添えるようになりたいと思った。



アスポート ほほ 全体研修

～ 講演テーマ～
**子ども親も幸せになる発達障害の子の育て方（支援者向け）
 幼い発達障害が疑われる子の保護者への伝え方**

たいてい みつて
講師 立石 美津子 氏



講師プロフィール

著述家
 学習塾を20年経営し、現在は著者・講演家として活動
 自閉症スペクトラム支援士。
 『一人でもできる子が育つテクノロジーがあさんのすすめ』
 『はすれ先生にあつたとき読む本』
 『子ども親も幸せになれる発達障害の子の育て方』
 『動画でおぼえちゃドリル 笑えるひらがな』
 など、著書多数
 単行本『発達障害に生まれて』のモデルとなった
 (日本医学ジャーナリスト協会賞大賞受賞作)
 オフィシャルブログ <https://ameblo.jp/tateishi-mitsuko/>

日時
 令和5年11月15日(水)
 10:00～11:45

場所
 埼玉共済会館6階602号室
 埼玉県さいたま市浦和区陣町7-5-14 ※裏面に地図

対象
 アスポートに所属する、
 ・学習支援員
 ・学習指導員
 ・チューター
 ・学習支援ボランティア
 ・家庭訪問支援員(子どもの見守り支援員)

内容
 1. 発達障害のお子様を持ち、著者・講演家としてご活躍中の立石氏をお迎えし、お子様と歩んできた日々で得た学びやご自身の経験に基づくお話を伺います。
 2. 障害受容から二次障害について学び、子どもへの声のかげ方、親の支援について考える機会とします。

※二次障害とは
 発達障害のある方は、その特性や置かれた状況が原因で、自分自身で気づかずに、気づかぬうちに、発達障害と診断されていない場合でも、発達障害の傾向があるというグループの方もいます。見た目からはわかりにくいことで、周囲からの理解を得られずに抱えていることを抱え込んでしまうことがあります。適切な対応をしないと自己肯定感が下がったり、引きこもりや不登校になるケースも多くなります。

一般社団法人 彩の国子ども・若者支援ネットワーク
 埼玉県さいたま市浦和区高砂 3-7-2F

③エリア研修「被児童虐待当事者から学ぶ」

日時	令和6年1月10日(水)～2月15日(木)に計10回(1回あたり1時間)
場所	彩の国子ども・若者支援ネットワーク 埼玉県内の事務所(一部外部の会場使用) <ul style="list-style-type: none"> ・ 1月10日(水) 浦和センター ・ 1月12日(金) 三郷見守り事業(ピアラシティ交流センター) ・ 1月16日(火) 越谷センター ・ 1月23日(火) 春日部センター ・ 1月24日(水) 白岡センター(まちの寺子屋Coco) ・ 1月30日(火) 坂戸センター(北坂戸公民館) ・ 1月31日(水) 桶川センター ・ 1月31日(水) 狭山センター ・ 2月8日(木) 本庄センター ・ 2月15日(木) 秩父センター
目的	被虐待当事者の体験談を通して、困難な状況にある子どもへの接し方や支援の方策について考える。
講師	一般社団法人コンパスナビ事務局長・支援事業部部長代理 ブローハン聡氏 他、被虐待当事者の若者3名
参加者	学習支援員・学習指導員・ジュニアアスポート事業チューター(教室補助員)167名
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 被虐待当事者の体験談 ・ 当事者が当時大人に対して望んでいたこと、大人からかけられて嬉しかった言葉

■参加者より

- ・ 貴重なご経験とご心情を伺い、“自分はまだまだ子どもに寄り添うことができている”ことに気づかせていただきました。子どもの声にしっかり耳を傾けていきたいと強く思いました。
- ・ 当事者の話を聞く機会はほとんどなかったので、自分の関わりが本当に意味があるのか、誰のためのものなのか考えさせられました。困難な状況におかれた子どもたちは周りの大人や希望を持

つことをあきらめている、子どもの命は大人ににぎられている、非常に重いことばでした。

- ・ 施設に入所した時に「夜ごはん何が食べたい？」と聞かれて一晩泣いたというエピソード。選択肢を与え続けるような大人がいたらもっと成長できたのと思う、と話されていたことが印象に残った。
- ・ 大人の一言でこうも前向きに生きる力を与えることができると感じて、子どもに寄り添う姿勢と言葉がけに注意しながらも、不自然ではなく暖かさを感じさせられるような支援をしていきたいと思えます。支援する姿勢を深く学ばせていただきました。
- ・ 本当に貴重なお話をありがとうございました。実際の経験・感情から発される言葉や立ち振る舞いに心を動かされました。今の私たちに一番必要であった研修だと感じます。改めて、困難な状況にある子ども達と関わるモチベーションや価値観を頂きました。



④自主企画「子どもに関わる大人の課題 支援者の二次受傷とケアの必要性」

日時	令和5年9月6日(水) / 令和6年3月21日(木)
場所	彩の国子ども・若者支援ネットワーク桶川センター 鴻巣市本町コミュニティセンター
目的	受託している学習支援事業および支援対象児童等見守り強化事業における家庭訪問支援員として、円滑な業務遂行に必要な知識の獲得および家庭訪問支援スキルの向上を目指す。
講師	大東文化大学文学部教育学科 北風菜穂子氏
参加者	桶川センター学習支援員 11名 / 鴻巣市家庭訪問支援員 13名
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 支援対象者との信頼関係を築くための傾聴のワーク ・ 支援対象者本人が問題を解決するために重要な傾聴について ・ 支援者の二次受傷と支援者のケアについて

⑤自主企画「通信制高校を知る」

日時	令和5年8月30日(水)
場所	わせがく夢育高等学校
目的	近年、支援対象者の中には私立の通信制高校へ進学する子どもがいる。実際、秩父センターが支援している子どもの中にも複数名おり、今度も進学者の増加が見込まれる。そこで現地へ実際に足を運び、支援者として通信制高校についての理解を深め、進学希望者の支援に役立てることを目的とする。
講師	わせがく夢育高等学校副校長 新井和弘氏
参加者	秩父センター学習支援員 5名
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 施設やスクーリングの様子を見学 ・ 通信制高校での学習指導内容

⑥自主企画「デートDVについて」

日時	令和5年9月6日(水)
場所	彩の国子ども・若者支援ネットワーク浦和センター
目的	支援対象者の子どもは主に思春期であり、学習以外にも人間関係でのトラブルや悩みを抱えていることがある。その中で交際相手からの身体的・精神的な暴力「デートDV」について、支援者として理解を深める機会とする。
講師	With you さいたま 萩原あすか氏
参加者	浦和センター学習支援員19名
内容	<ul style="list-style-type: none">・ デートDVとは・ 被害者・加害者にならないために・ 自分や相手の心と身体を大切にすることは・ 支援員が子どもたちに伝えられること

⑦自主企画「生活保護制度を知る」

日時	令和5年12月14日(木) / 令和6年1月18日(木)
場所	彩の国子ども・若者支援ネットワーク春日部センター / 秩父センター
目的	事業開始から10年以上が経過し、前職の経験が様々な職員が増えた。埼玉県福祉部として学習支援事業の立ち上げに携わり、現在は高千穂大学教授の大山氏を講師に迎え、生活保護制度についての知識を習得し、学習支援事業の必要性・重要性について考える機会とする。
講師	高千穂大学教授 大山典宏氏
参加者	春日部センター学習支援員12名 / 秩父センター学習支援員5名
内容	<ul style="list-style-type: none">・ 生活保護受給条件や扶助内容・ 高校進学に伴う受給内容の変化・ 大学等進学の際の支援と世帯分離について

⑧研修動画作成

目的	これまで法人紹介の動画はテレビ局が作成した密着取材の番組のみであったため、著作権の関係で広く周知することが難しかった。また、3年前に代表理事が交代したため、法人の設立者である前代表理事から設立の経緯や趣旨を継承していく必要がある。そこで、大学講義や講演会での使用や内部の新任研修で使用することを目的に、法人独自に動画を作成した。
用途	<ul style="list-style-type: none">・ 新任研修・ 大学講義や各種講演会における広報活動・ ボランティア募集サイト activo (アクティボ) 内での掲載
作成者	西坂らいと氏
動画	https://youtu.be/MXitRIVHano

3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

① 全体研修

これまで費用面の課題もあり、外部講師を招いての大規模な研修を開催することが難しかった。しかし貴財団の助成金により外部講師を招いての全体研修を2回開催することができた。外部講師

を招いたことで、異なる第三者の立場からの視点や助言を得ることができた。特に行政職員を講師に招いた研修では、行政側の取り組みや虐待の現状を知ることができたとともに、行政側が民間に期待していることを学ぶことができた。

② エリア研修

講師が各事務所を巡回するエリア研修は初の試みであった。被虐待当事者を講師に迎えるということもあり、非常にセンシティブな内容であるため、少人数での実施を目指した。研修コーディネーターを置くことができたため、きめ細かな調整ができた。それにより、講師と参加者の距離が近く、全体研修よりも質疑応答が活発に行われた。ただし、巡回型の研修は講師との連絡調整の負担が高いことが課題として残った。

③ 自主企画

自主企画枠を設けたことで、全体研修やエリア研修では取り上げることができなかったテーマやより支援員のニーズに近いテーマを学ぶ機会を創出することができた。ただし、一部の事務所は自主企画枠を利用しなかったため、今後は研修コーディネーターがニーズを聞き取りテーマ・講師選定の相談に乗るなど、サポート体制を整えていくことが必要であると思われる。

④ 研修動画

動画を作成したことで、大学教員から授業で使用したいとの希望が相次ぎ大変好評であった。繰り返し研修ができるという動画のメリットを活かすことができている。今後は誰もが気軽に視聴できるよう法人ホームページへの掲載も検討しているため、現在の動画をリメイクした短縮版の作成も予定している。

⑤ 今後の課題

研修コーディネーターについては毎年設置することを目指しているため、個人・団体の支援者を増やすことで自立的に運営できる仕組みを構築することが必要である。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

感想については「2. 実施した奨学活動の詳細」を参照

5. 学識者からのご意見、コメント、等（申請カテゴリーにて「S」が付されている団体）

支援者は、子ども達に寄り添い、支援にかかわる具体的なスキルを身につけることだけでなく、貧困を生み出している社会の構造、支援の行政的仕組みの理解、その他広範囲な問題を認識できる基礎的な力量形成が必要とされる。つまり、極論すれば、困難を抱える一人一人が提示する模範解答が存在しない課題に、全人格的なかわりをもって接する現場にいる。支援者は、こうした重い課題をアスポートの経験と支援者相互の交流を基礎にして、課題を一人ひとりの情熱と工夫で乗り切ってきた。しかし、発生する課題とそれを理解するための情報は常に増加し、支援者個々の努力と関心の域をはるかに超えるものとなっている。貴法人の助成金によって、懸案であった外部の専門家による各種研修会の実施、それを基軸とした支援者相互の交流会、研修企画への自主的参画などが実現できたことは、支援者の質を高め、支援事業を維持・継承する組織力を形成する大きな意味を与えたと高く評価することができる。同時に、学習支援事業へのかかわり度合いも様々で、年齢、学歴、社会的経験、所有資格も多岐にわたる大量の支援者が、事業への熱意と社会的意味を確認しながら事業を継承していくことに、本助成による研修企画は、新しい課題を与えてくれた。

（埼玉大学 名誉教授 山口和孝）